

私たちは何処から何処へ——起顕竟の法門の教化実践報告——

吉 本 光 良

はじめに

私の、この発表は、私が私を教化した実践報告です。

私は高校で生物、化学、物理を習い。農学部農業化学科へ進学し、自然科学的な考え方を学び、製菓会社に就職、菓子の開発製造に従事しました。生家である寺の都合で日蓮宗の教師と成る事が要請され、立正大学の仏教学部宗学科の三年に編入学しました。仏教学部の授業は、自然科学と違って、実験実証で証明されるものではありません。ただひたすらに用語を記憶、何とか信仰道場を出て日蓮宗の教師になり、卒業しました。

寺に帰れば、檀信徒へ向けての法話・説教が必須です。自分が信じていない事は話せません。そこで、仏教を学び、日蓮宗の教義を学ぶ私・吉本光良が、自然科学的な考えに染まっている私・吉本光良を説得、教化する実践が続きました。しかし、自然科学に染まった私は中々納得しません。

ある時、方便品の『仏知見』という言葉が浮かび、「仏知見とは、仏の見方、考え方、認識の仕方です。仏の知見でこの世の事を考えるのが仏教です。」と、自然科学に染まった私の説得を試みました。自然科学に染まった私は「仏教の基本的考え方である、輪廻転生なんてあり得ない、有るのだったら証明してみろ。」と、反発しても、「それは、あなたの知見、あなたの見方、考え方、認識です。」と、反論が出来ました。そこから始まったのが、この「起

顕竟の法門の教化実践報告―です。

一、塵点の劫おし過ぎていまじいの 妙のみ法にあひまつりしを

身延山の三門を潜ると、身延山久遠寺の本堂へ一直線に登っていく菩提梯が見えます。その手前の右側に宮沢賢治の「塵点の劫おし過ぎていまじいの 妙のみ法にあひまつりしを」という句碑があります。この句は、『雨ニモマケズ』が書かれていた『雨ニモマケズ手帳』の鉛筆さしに、鉛筆の代わりに丸めて差し込まれていた紙片に書かれていた句です。『雨ニモマケズ』を、平がなと漢字を交えて書いてみます。

雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫な体を持ち
欲は無く 決して瞋らず 何時も静かに笑っている

一日に玄米四合と 味噌と少しの野菜を食べ

あらゆる事を自分を勘定に入れずに 良く見聞し解り、そして忘れず

野原の松の林の陰の小さな萱葺きの小屋に居て

東に病氣の子ども有れば 行つて 看病してやり

西に疲れた母有れば 行つて その稲の束を負い

南に死にそうな人有れば 行つて 恐がらなくても良いと言い

北に喧嘩や訴訟が有れば つまらないから 止めろと言ひ

日照りの時は 涙を流し 寒さの夏は おろおろ歩き

皆にデクノボーと呼ばれ 褒められもせず 苦にもされず

そういう者に 私は成りたい。

そして、この『雨ニモマケズ』の、すぐ後に書かれているのが、曼荼羅御本尊の最上段です。

南無無邊行菩薩

南無上行菩薩

南無多寶如來

南無妙法蓮華經

南無釋迦牟尼佛

南無淨行菩薩

南無安立行菩薩

宮沢賢治は、岩手県花巻市の宮沢家の長男として生まれました。しかし、賢治は、法華經、日蓮聖人の教えの理解者です。自分が塵点劫の昔、法華經虚空会の世界で、仏の誓願・仏勅を受け、法華經の伝道者として、この娑婆世界に生まれた事を、信得・信受していたようです。ですから、賢治の作品は法華經の教えそのものと言えます。その、法華經の伝道者としての賢治の理想の姿こそが『雨ニモマケズ』です。だから、「南に死にそうな人有れば 行つて 恐がらなくても良い。」「お題目をお唱えして、一緒に曼荼羅本尊の世界、靈山淨土へ行きましょうね。」と、自信をもって言えるのでしょうか。「皆にデクノボーと呼ばれ」ても、「褒められ」なくても良いのです。なぜなら、自分は曼荼羅世界・法華經の淨土・靈山淨土に帰還できるのですから。宮沢賢治は、曼荼羅本尊の世界から、この娑婆世界へ生まれ、又、曼荼羅本尊の世界へ帰還する事を人生の目標・自身の信仰としたのでしょうか。

身延山久遠寺の三門を入って、菩提梯を登る手前に有る宮沢賢治の句碑「塵点の劫おし過ぎていましこの 妙のみ 法にあひまつりしを」は、

「みなさん。今から向かう身延山久遠寺は、日蓮聖人の曼荼羅御本尊の世界、私たちの永遠の故郷です。

私たちは、塵点劫の遠い昔、お釈迦様に『法華経を弘めて下さいよ。』と依頼されて、この娑婆世界に生まれて来たのです。それを、思い出しましょう。」
と、参拝者へ呼び掛けています。

二、立教開宗七五〇年 『お題目総弘通運動』 「佛の子を育てよう」

平成五年六月、第十七回中四国教化研究会議のテーマは『意義づけよう曼荼羅の世界』。その分散会の問題提起者として発題しました。

今、宗門では『お題目総弘通運動』『佛の子を育てよう』として、「信仰の相続」を打ち出しています。「信仰の相続」とは、何を相続するのでしょうか。人は皆、人生の最後を迎えます。人生の最終目的地の決定こそが、「信仰の確立」であり、人は、その信仰の最終目的地のシンボルを本尊として祭り、その本尊の世界へ行ける事を願うものです。ですから「信仰の相続」とは、その最終目的地を共にする事であると、言えます。今ここで、私達お題目を唱える者の最終目的地『曼荼羅御本尊の世界』を本年度の中四国教研会議で取り上げる事は大変に意義深い事であります。

《曼荼羅本尊の世界とは》

法華経の中の虚空会説法、十二品で説かれる法門を「起顕竟の法門」と言います。釈尊滅後の法華経の弘通者は誰か？という問題が提起され（起）、弘通者が顕され（顕）、その弘通者に釈尊からの依頼が終わる、畢竟する（竟）の法門であります。この虚空会の説法の場の姿こそが『曼荼羅御本尊の世界』であります。

「抑も此の御本尊は在世五十年の中には八年、八年の間にも湧出品より属累品までの八品に顕れ給ふなり。（中略）是れ全く日蓮が自作にあらず、多宝塔中大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊也。」（日女御前御返事）

《曼荼羅本尊の世界は我々の故郷》

この娑婆世界で釈尊の滅後にこの法華經を弘める者は四菩薩を先頭とする地湧の菩薩であり、この地湧の菩薩が末法の始めの五百年の間に出現し、末法の人々の救済に立ち上がる事が法華經の未來記、予言として有ります。この法華經の文を、身をもって実証なさったのが日蓮聖人であり、日蓮聖人こそが法華經の予言にあった地湧の菩薩の先頭、上行菩薩であります。私たちお題目をお唱えする者は皆、あの曼荼羅御本尊の中で釈尊に滅後の法華經の布教を託された地湧の菩薩であり、釈尊の久遠の弟子として、この世に出現し、この世での使命を果たして、又あの曼荼羅御本尊の世界へ帰って行く菩薩であるとお示しです。

「日蓮と同意ならば地湧の菩薩たらんか、地湧の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑んや、（略）皆地湧の菩薩の出現に非ずんば唱え難き題目なり。」（諸法実相鈔）

《地湧の菩薩の自覚→信心の確立》

私達はお題目をお唱えして、私たちの記憶には無い遠い昔に、この曼荼羅御本尊の世界で久遠実成の釈尊より、この娑婆世界で法華經を多くの人々に伝える事をお誓いした上行菩薩（日蓮聖人）の眷属（部下）である事を思い出す、自覚する事が第一です。

《地湧の菩薩の使命を实践→安心の確立・現世安穩》

そして、その地湧の菩薩としての使命を实践する事。即ち、この娑婆世界に法華經を弘める、「曼荼羅御本尊の世界、常寂光土の建設」に励む事が第二。お題目総弘通運動は当然の務めと言えます。

《来世の安心→後生善処→安心立命》

そして、第三が現世での法華經の広宣流布・お題目総弘通運動こそ、曼荼羅御本尊の世界へ帰って行けるという安心でもあります。「我より後に来り給はん人々は、此車にめされて靈山へ御出有べく候。日蓮も同じ車に乗って御迎に

まかり向ふべく候。」(大白牛車御消息)

檀信徒と共に、この「曼荼羅御本尊の意義」を改めて確認し合う事は、我が宗門の信仰の本筋を明らかにする事であり、また久遠実成の釈尊への報恩、「一天四海皆歸妙法」の祖願の達成へ向けての新たな第一歩になる事と信じます。

平成十四年、宗門の『お題目総弘通運動』誓願に生きる運動は終了しました。

三、降誕八〇〇年『立正安国お題目結縁運動』

平成十七年四月より、新しい宗門運動『立正安国お題目結縁運動』が始まりました。当時、私は全国布教師会連合会の常任理事をお受けしていた関係で、日蓮宗の『宗報』、平成十九年十一月号に、「布教の現場から、『立正安国論』の学習を進めて」と題して、所感を発表させていただきました。その要点は以下の通りです。

一、はじめに、

平成十八年の秋からは、管内でも教師の研修会があり『立正安国論』テキストの通読会もありました。講習会もありました。有縁の各地での講習会へも参加させていただきました。そんな中で「立正安国論をそのままの形で現代に布教するのは、時代錯誤である。今、四箇格言を表に出して、布教伝道する事は時代認識の誤りである。」等々の意見もありました。あるいは又、『立正安国論』での布教伝道は難しいが、『立正安国』、則ち、正法を立てて、国を安んじる。という事なら現代にも通じるだろう。」という意見も聞こえて来ました。

二、『立正安国論』上奏の時代背景の概要など

三、『立正安国論』の概要

四、日蓮聖人の出家得道の願いと目標は

日蓮聖人の出家得道の願いと目標は、『仏に成って、恩ある人々を救う事』です。十二才で清澄山に入られ、十六才で出家得道、比叡山での遊学を終え、三十二才での立教開宗の時には既に、その成仏の直道を見出されていたはずです。その、「仏になる教えの直道・明珠を他宗との公場対決の場で披瀝する機会を得る為の行動」、それこそが、『立正安国論』の上奏でした。公場対決は実現せず、その明珠を明かす機会は失われました。

しかし、一方では、佐渡島に流罪になる事で、ご自身が法華經の行者、地湧の菩薩の再誕であるとの確信も得られた様です。そして、等身の大事として、佐渡流罪の翌年『開目抄』で末法救済の大導師である上行菩薩は、この日蓮であろうと開顕され、その翌年には『観心本尊抄』が著されて、末法救済の教えは題目であり、その題目を受持した時の本尊の様相が示されました。ここに、他宗との公場対決の場にて披瀝されるはずであった、成仏の直道・明珠が明らかにになりました。

五、日蓮聖人の成仏の直道・明珠とは

日蓮聖人は、『開目抄』で、『五箇の鳳詔』をお示しにされました。「宝塔品」の三箇の勅宣と、「提婆品」の悪人成仏と女人成仏の二箇の諫曉がそれです。日蓮聖人にとって、法華經の本仏の要請に答えて、本仏の勅使となる事、末法に法華經を弘通する法華經の行者、地湧の菩薩と成る事が「仏と成って、恩ある人々を救う道」でありました。日蓮聖人は、この『五箇の鳳詔』をご自身への仏勅と受け取られ、その仏勅を成就することが成仏の道であり、知恩報恩の唯一絶対の道とされたのです。

この『五箇の鳳詔』によって説き始められた教えこそが、法華經の虚空会で説かれた、末法救済の教え、末法為正の教えであり、日蓮聖人独自の法華經観であります。『新尼御前御返事』の「法華經の中にも迹門はせずして、宝塔より事おこ（起）りて寿命品に説き顕し、神力品囑累に事極りて候」の文から、起顕竟の法門と言われます。

この虚空会の説法の主題は、末法の付属です。法華經迹門の流通分である、『法師品第十』より始まり、仏の滅度

の後の、法華經の弘通者を勧募し、弘通の難事と、弘通の功德の広大さを説き、法華經の弘通を勧め、その方法を説きます。その迹門流通分の最後である『安樂行品第十四』に説かれるのが「譬中明珠の喩」です。この「譬中明珠」こそが法華經の神髄であり、真の勇者、末法の法華經弘通者に与えられる明珠であり、「良医治子の喩」の良薬である一念三千の珠で有りましよう。

六、おわりに

「立正安国お題目結縁運動」が始まり、始めに下種がいわれました。仏種については、『日蓮宗事典』に詳しく解説されています。本已有善の機と本未有善の機、種熟脱の三益、等々。この仏種と仏性との関係も「仏種の性種と乗種」、「仏性の正因・了因・縁因仏性」として、その関係が示されています。このお題目結縁運動の推進に当たって、日蓮宗の教師全体が心の一つにして邁進する必要があります。異体同心でのお題目結縁運動が必要です。先の「お題目総弘通運動」の時の様に、教師がそれぞれの立場を主張し合っては、「城者として城をやぶるが如し」であります。今一度、『宗義大綱読本』を紐解き、日蓮宗教師の一人一人が、宗義大綱を共通理解すべき時です。日蓮聖人の教学を再確認すべき時と存じます。

その後、平成二十一年二月号と、平成二十二年五月号に所感を発表させて頂きました。

四、起顕竟の法門の教化実践

以上の様に、私が檀信徒や一般の人へ向けてお話ししている起顕竟の法門の教化実践とは、

「日蓮聖人こそが法華經の予言にあった地湧の菩薩の先頭、上行菩薩であり、私たちお題目をお唱えする者は皆、あの曼荼羅御本尊の世界で釈尊に滅後の法華經の布教を託された地湧の菩薩であり、釈尊の久遠の弟子として、この世に出現し、この世での使命を果たして、又あの曼荼羅御本尊の世界へ帰って行く菩薩である。」

という事です。

昭和の終わりのころ、名古屋の長谷川正徳僧正が、山口県の巡回布教に來られて、お説教されました。曰く、

「天台宗や法華經迹門の教えは、仏性開發の教えです。從因至果の法門です。『皆が仏に成れるのだから、仏道修行に励んで、皆で仏に成りましょう。』と言う教えです。『人事を尽くして天命を待つ。』教え。日蓮宗の教え、法華經本門の教えは、從果向因の法門です。『仏に成って、菩薩に成って、菩薩になる道、菩薩道に励む。』と言う教え。『天命に従って人事を尽くす。』という教えです。」

今、私たちが学校で習う命の学問、生命学は自然科学としての生命学です。私も五十年前、宮崎の大学で生物化学や有機化学を習いました。定量分析と定性分析、実験を繰り返して、同じ量と同じ性質を示す事を積み上げて、科学的証明とする学問です。誰が実験をしても同じ結果が得られなければ認められない学問です。それが例え、宗教であっても、民族の伝承であっても、科学的に証明の出来ない、生命観は学校では教えません。学校で教えられるのは、ダーウィンの進化論と生命の発生学、生殖学です。私たち人間の遠い先祖は、サルなのです。

葬儀や通夜、年回法事などで、仏教の基本的な生命観である輪廻転生の話や、仏教式葬儀式の意味や、その建前を説明すると、納得する人もいますが、なかなか信じていただけません。そこで私は、仏知見という言葉を使って説明します。

「仏知見とは仏の知見、仏が見るこの世の見方、考え方です。私たちのとは違ったものの見方です。その仏の知見で私たちを見れば、永遠に輪廻転生している命なのです。」

と、それでも話の後で、「輪廻転生は無いですよ。前世の記憶が無いのだから、輪廻転生は方便ですよ。」と、真面目に聞かれる日蓮宗の教師も居ます。自然科学の悪業の因縁が、日蓮宗の教師にまで蔓延している様です。もっと心を柔和にして、色々な見方、考え方で心豊かな人生をお勧めしたいものです。

合掌。

現在使用しているパンフレット等は、以下のものです。本日ご参加の皆様には配布します。

① 平成五年、吉本光良が著述し、日蓮宗山口県教化センターより発行した曼荼羅世界の学習書、『何処から、あなたは、何処へ（日女御前御返事の解説）』……………資料①

② 平成十五年、東京国立博物館にて『大日蓮展』が開催されました。その中で、広島県・妙政寺所蔵の宝塔絵曼荼羅が展示されました。曼荼羅御本尊の諸尊が絵解きされ、その下の部分に武家の夫婦が書き込まれています。曼荼羅世界への帰還の具体例として、この写真をコピーして、使用します。『大日蓮展』一二六ページ……………資料②

③ 平成二十年、宗門より『立正安国・お題目結縁運動』のパンフレットとして、『靈山往詣』が提供されました。日蓮聖人のお手紙で曼荼羅本尊の世界への帰還が確約された証明として、使います。……………資料③

④ 日本で執り行われている仏教式葬儀の基本的な考えや、七日忌のお経の事、盆や正月にご先祖様が帰ってくる事などを羅列したパンフレット。通夜や初七日の法話で使用しているパンフレットです……………資料④